

日本産科婦人科学会医師派遣報告書（気仙沼市立病院産婦人科）

順天堂大学産科婦人科 第4班（牧野真太郎、竹田 純）

期間：4月6日～4月10日

順天堂より最終組として7日朝6時に夜行バスで仙台入りしました。JAL ホテルが4月3日付で解約されていたため、東北大学産婦人科の宇都宮先生に連絡をとり、東北大学発気仙沼着のバスが出るまで東北大学の当直室で待機させていただくことになりました。11時に八重樫教授、宇都宮先生と面談し気仙沼の様子や注意点について御指導をいただきました。

正午のバスで東北大学を出発し、午後3時過ぎに気仙沼着。被災地を視察した後に当直業務開始となりました。病院には食料物資も充実していたため日常生活に関する問題はありませんでしたが、依然として被災され家や車をなくした職員は病院や近くのホテルで寝泊りしていて、言動には注意が必要であると感じました。

7日は当直を竹田 純が担当しました。当直中の夜間11時過ぎに、3月11日以来最大の余震がきました。地震直後から町全体が停電となり自家発電での対応となりました。揺れの質は東京と違い小刻みに縦に揺れるもので、同時にドドドドという地鳴りが聞こえました。常勤医師に連絡を取りましたが、携帯電話の連絡付かず。病棟を見回り患者さんに変わりがない事を確認しながら、病院の状態を確認したところ一部壁が崩れている部分を認めました。院外では町中にサイレンと津波警報のアナウンスが流れ、病院職員も騒然とした空気になりました。高台にある病院入り口には近隣住民が避難しに来たため、病棟からイスや毛布を避難住民に配り寒さ対策を行いました。同時に救急外来ではトリアージが始まりました。12歳の患者様がCPAで運ばれてきて、救命処置をうけられました。元々失神発作の既往がありQT延長症候群が疑われていたようです。救命はされましたが、一日たった後にも痙攣が続いており、ヘリコプター搬送の予定と聞きました。治療として脳外科の先生が低体温療法等も検討する旨を話していましたが、停電からの復帰の目途がつかず、復温が出来ない可能性があるため却下となりました。当科では停電による医療行為制限は感じられませんでした。産婦人科病棟には大きな問題はありませんでしたが、地震直後からの陣痛発来の方が1名入院となりました。

8日は停電のため全ての外来業務は休止し、急患のみの対応となりました。朝8時に気仙沼市全体に外来休止のアナウンスがながれたため、外来には数名のみの受診しかありませんでした。妊婦さんに関しては、受診されたかたのみ妊婦健診を行いました。夜間は、余震の事もあり2人とも病院に宿泊することにしましたが、分娩や急患はなく落ち着いた夜をすごしました。

9日は土曜日のため、当直体制での勤務となりました。午後1時に大阪大学産婦人科医師が2名到着されましたので、申し送りを行い午後4時のバスで仙台に戻り、深夜バスに乗り換え10日に東京へ戻りました。